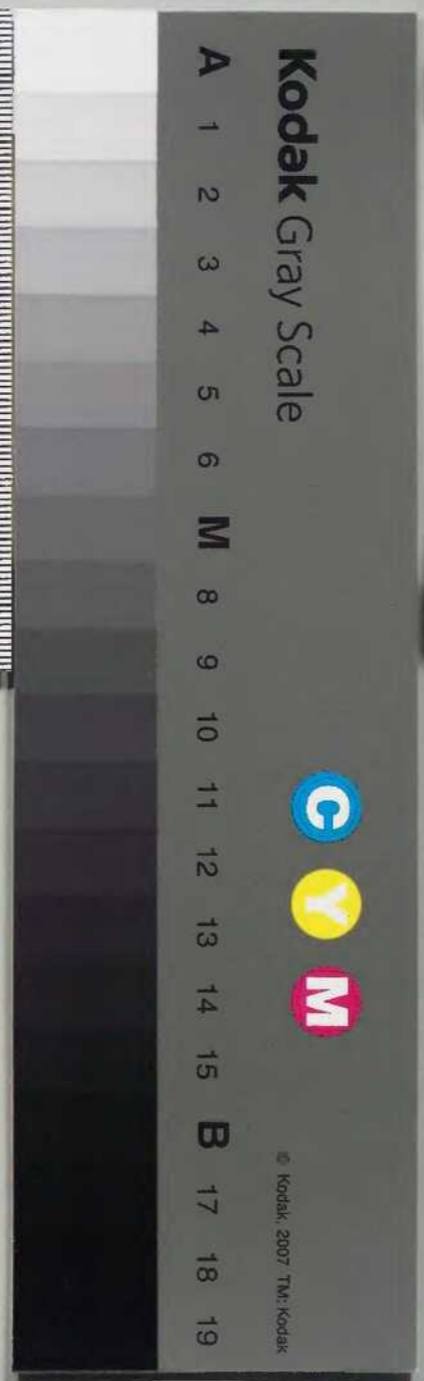


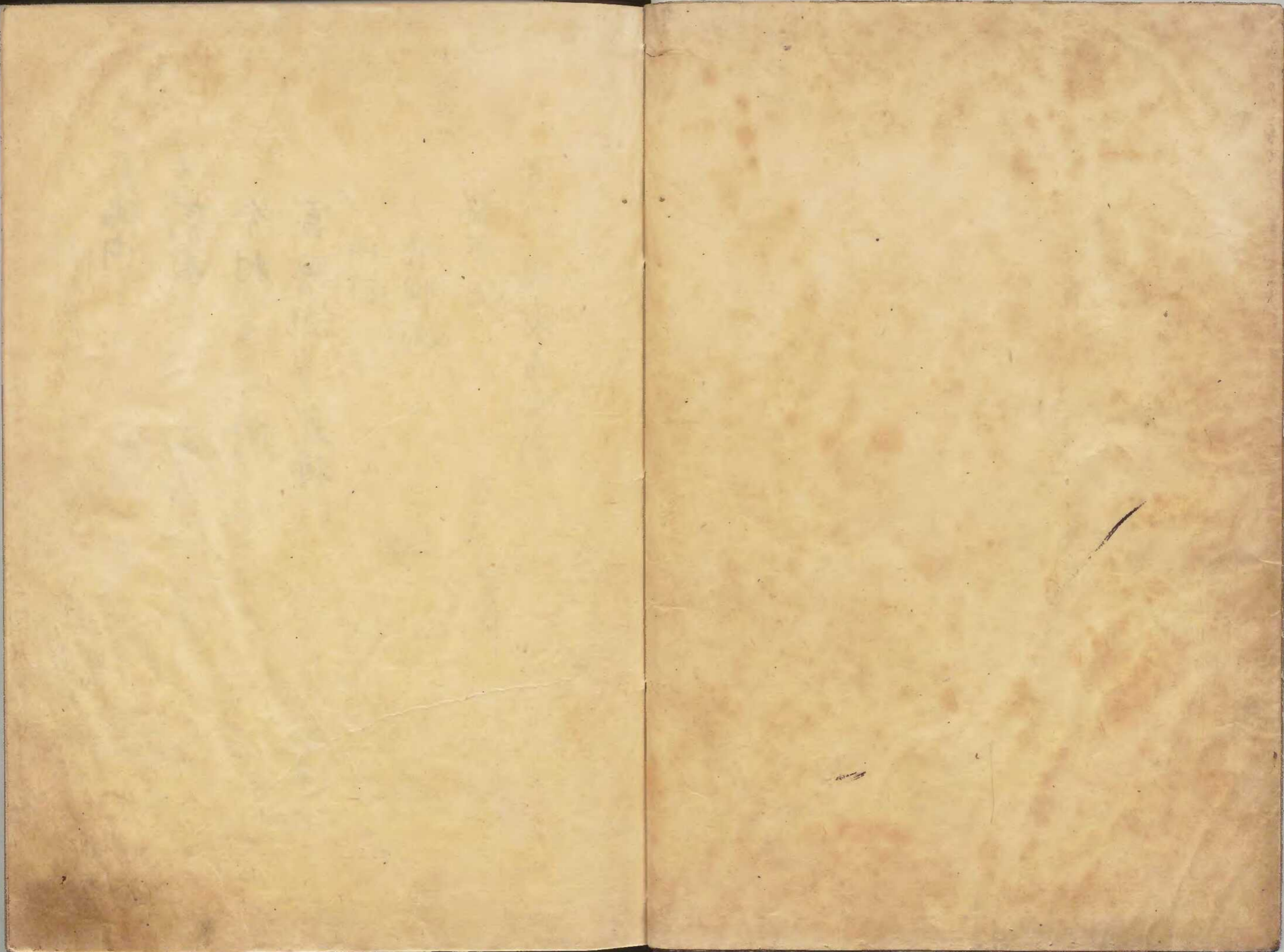
寛永諸家譜

藤原氏丙十冊之内二
秀郷流

第七番
十冊之内

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186(88)
函號 76 1





山内	荒木	今村	富田
五味	石尾	関	木村

寛永諸家系譜傳

藤原氏

丙二 小家



山内 秀郷流

去佐守忠義
 稱号とたまふ
 一
 松平の

大織冠八代

● 秀郷

後田佐下 武苑守母八下野掾麻嶋の女

千常ちんじょう

後五位下ごごかげ 左衛門尉さゑもんのかみ 檢非違使けびい 鎮守府將軍ちんよふのかみ
母はは 後源通ごげんとのみち かつしとめ

文脩ぶんしゅう

内舍人うちしやうにん 法守府將軍

文行ぶんぎょう

後五位下 左衛門尉 母はは 利仁りじん かつしとめ

乙光おつひかり

後五位下 左衛門尉 母はは 長束ながたば 依定よさだ 文ぶん かつめ

乙清おつしみ

左衛門尉 檢非違使 依友よとも と号ごう かつめ

脩行しゅうぎょう

左衛門尉 依友よとも と号ごう かつめ

助清すけはら

白しろの首くび之の河かは守まも乃の位ゐ人ひと
主馬首しゅばしゅよりて首くび友ともと号なづ以も或あるハ
守まもの字なをともらせ

秀清ひではら

依藤流よふぢゅう 如行にょぎやう 止末しすゑ あり

助通すけとほ

白しろ友とも守まも

頼義よりよし 頼朝よりとも 乃の 郎らう 等らう 七しち 騎き 止し 末すゑ あり

通清とほはら

鐘田流かねのた

正清ただはら

兵清尉へいせいゑい

親清 ちんせい

左衛門尉

義通 ぎつう

刑部丞

親清が景子とすれ言の助清が子親通が
牙なり

親通 ちんつう

首友流

俊通 しゅんつう

刑部丞 源口

保元平治の度乃合戦一義朝胡后
一あひ志こがひ我功を流く六条
河原の軍討死

經俊つとむ

刑部丞つとむのぢ

右馬允うまのぢ

此乃ちひさしく新あらた紋いづ系づ馬づ終つ失し寸す

貞通つとむ

山内やまうち孫まご六むと号な人ひと

慈照院じしょういん殿との常とこ徳とく院いん殿との一ひと子こ

盛通もろとむ

日ひ白しろ守もり

某なにか

某なにか

日ひ白しろ守もり

某なにか

盛豊もろとよ

山内やまうち佐すけ馬ま守もり 生なま國くに丹に波は 坂さか尾お州しゅう 一ひと

しつり伝

織田家一ツノ尾列黒田の城ニ居す
弘治三年尾州岩倉ニシテシク討死
先祖乃家の紋ハ黒白一文字ナリ申改メ
丸ノウラハニ紫ノ柏ニシテシク
丹波の山ニシテシク合戦の時敵軍ト
シテ味方ハ士卒敗れシト此時先祖某
軍將トシテ怒ヲ發シテシク強ク
あひたぐわ先白の軍將ニシテシク

一物なすらふ
と死柏乃枝
むさく一だくひ勝利と
柏の紫このうらさるる者例
白一文字をいふは丸の内
之紫をいふは

某

十郎

弘治之年尾州岩倉一とひく父
盛号と回不中く討死歳十六

一豊

去依守 生必尾法

あ挟必る演一りり又は州也濱

一りり乃ちを州を川よりり

信一秀吉一りり

元亀元年四月秀吉信長の命を

わりり法軍といひて元々越ゆる

合戦一りりしき岩倉義系と合戦

の一りり一巻すみくく敵軍矢

と射れ事両れ一りり夫らゆら

一巻が顔はあろ一巻膽氣海とく

ころん一りり地の矢とぬきと

剣を接く敵陣一りり磯りの敵の

首をさ系信長もかりとれと

薬をいゆ

同二年浅井の念と在り信長

叛と記一巻秀吉此指麾し属
戦功あり

と正六年八月播磨之本此城より起
小之郡長瀬乃城より一巻を奉て
ろしつ日十五日の兼石越中守城より
く赤古口の附城より一巻を奉て
とまふ一巻を嘉古口より一巻を奉て
乃首とすれ事あり
是も六年上松系勝運謀よりあり

東照大権現七月一日野州小
山一進敷一巻あり時一巻借を
すこの長石田と成濠州岡原より一巻
謀殺をくいりるより一巻を奉て
あふふより

大権現御一巻を奉て時と方五なり
よりひろふ一巻を奉て其の父を廻り
阿ひと奉て一巻を奉て一巻を奉て
ついでに封をひり守小山

なひくみの特二返と

大権現——たぐはつるを死はかくそよ

感——海は一を云と——ききく

海つりくい——まみやふは出るあり

て賊徒と湯返治ある海——きうり

とひくいのを川乃城をびよ人

質をよこす海——あり

大権現もふ——湯返交ありとまふら

内友之は湯の尉伝成をまら——を川の城

ありひ——人質をらまらり人質

まきみやふ小田原よはつらひ

あまより東海乃此城自若一をが忠貞

をゆきく——く法城と

大権現——猷——海つれ

同年八月二十二日 岐阜のとき

い——まきみやふい——みなふはと

海に教命とくゆりく大垣の城と攻

同年土佐と一をよ下——海ふ

同九年に承久の叙せし進士依ちし何れ
同年に聖坊に浄茶入を命じられ
同十年 伯とわたりて對馬を忠義
に婚姻とやくししに
右院殿より則重の沖腰おとせぬに
同年九月廿日歳六十にして卒と

女子

安友伊賀守が弟某の妻

女子

妻田猪太富の尉の妻

女子

野中自計の妻

康孝

山内修理亮

織田信長よつふ七十七歳にして死す

女子

西園寺前内大臣の益乃室

女子

稻葉依波守正成の妻

女子

山内を岐守の妻

政妻

山内右兵衛尉之二十二歳のて死す

童昌

深尾おねの妻

忠義の家老のやのひの子とす

一唯

山内豊前守

享徳十九年大坂御陣の時忠義の

戸より大坂へ負ひている

しわと一唯去依の軍兵とあひ

まの十一月に橋州勝山にいる

これ忠義の下知のしるりとすら

大橋現の湯の所にある

台徳院殿の魔下の属とす

寛永三年伊弉院番の役と河津と
酒井河波もが大組のらよとつた

同年

伊弉院殿の御も——たつとつる法陽

いれ

同八年日光伊弉院此侍も

同十一年

軍家伊入河津侍も 伊弉院の

のら侍と日光伊弉院の侍も

同十二年十七年日光 伊弉院の

侍も侍も侍も

忠義

松平左兵衛 志剛を川の城より侍る

実山内快理亮康を子より一を侍る

て子も侍

長十年伏見の城——侍る

侍る

大権現

右徳院殿

一 湯

一 湯

同年没五位下

一 叙

一 位

大権現松平隠岐守定勝のじよあゝ湯養

子とまゝさし忠義一姉一妹

ふのともこ侍前包平乃御腰物来國光

乃御腰物を許給也

右徳院殿よりもまゝ新友又國光乃御

腰物と御し給

同十八年没府一をひく

右徳院殿松平乃称号と御し給

の字をひく一綾小治定俊の

御腰物を御し給一叙せ給

と依ちよ位也

同十九年大坂陣より一白銀二百

貫目を御し給一伯を御し給

小妻乃せめがらを御し給

元和元年忠義土佐乃由ありて
大坂再陣のしをきく士卒を
引ひ船しし家くきみやう大坂
ししししししししししししし
河州甲浦よきしししし大風起船
とろろろろろろろろろろろろろ
系大坂よもももももももももも
軍兵すくくくくくくくくくく
寛永三年侍従は伊也

同九年

旨酒院殿薨御のししし造遺物
瀬戸肩衝乃御系入白銀こし枝を
し系此かろ御賜し海りりし御玉の時
御腰物御腰系治馬御服金銀
毎夜御飲也
父一豊しししししししししし
伊勢守信安しししししししし
信安浪人しししししししししし

なまらく信安に依りて世に演る川
去依いしきもり家よりよき
信安に對し旧主に礼をうけし
忠義の時よきもり養をこころ
する。元和二年に信安に依りて
よき病死す

忠豊

松平對了守

母ハ松平隠岐守定勝のむすめ

寛永元年十二月二十八日没五位下小

叙せしむ對了守に依りて

女子

松下石見守の妻母上におさる

忠直

山内修理大史母上におさる

寛永七年十二月二十九日没五位下小

叙せしむ修理大史に依りて

家紋

黑白文字

後栢の之末下改

山内
盛豊

五味

なほ山内氏より政義よいつりあ
らぬく又味と稱も山内乃系
譜盛豊いざんのるの松平之依守
とある一あるがゆゑよ是と略す

● 盛豊

山内伝る者 生國丹波

乃ち尾州より任を織田家へ
此の尾州黒田の城へ居て

弘治三年尾州岩倉よりひく討死

先祖の敵に黒白一文字ありの中より

丸の内より紫乃柏へあつたはれ

事ハ丹波の國合戦より敵軍より

しりより味方北士卒敗れすこゝ

と北軍將いりたりとて徳と敵

とあひこふ先白北軍共らあち

若おをうら杉ひさきりうんすれ

と北柏北枝をとりにてはしもの

ひさかへしうひ勝利とてりこの

とさ柏乃紫とのりうると吉例也

とく黒白一文字と河へあて丸の内

へ柏の之紫をもちて

梟

山内法眼 生國尾法

尾州岩倉より甲州へをもちこ
武田信玄は法名日泰

政義

源次郎 自殿御生國甲斐

信玄より入味常運が遠跡とす

少人おれより入味と稱す

天正十年

東照大権現甲州へ入函のとき政義

信玄麾下の兵士六十人を以て

今井九条と政義を継承

か

天正十二年小牧陣乃と兒信を

つとめ長久手合戦一政義軍功

ありし御陣の後

大権現甲州の法士我功此を以て

今井九条と政義

授

天正十八年小田原陣の時
 をうり改義するに
 他志の尉涉純奉引とたれ
 岡東涉入とたれ
 武苑の由岡戸村とたれ
 二十九歳少く病死

鉤倉
 酒井

豊直

令右衛門尉

天正十一年甲州一出生

大権現

台徳院殿

將軍家一一人とて

専長十七歳保科肥後守仙石長政大補
 訪因幡守吉田伊豆守等

ありく信州伊奈山一とひく材木
 をいざもれ時表遊 作とけき海

つるをひく

同十八年近習より取急なり ありて

ありと大津藩よりゆるぎせしむる

同一年久永源とある

作を抄りありと武藏お模あまを以捨す

同十九年大坂津陣より伝

釣命より多たまりりく 旗下の士乃

役不を配りて

元和元年大坂陣此より内政紀伊守

を以て屋敷を傳りて志ありし傳

考並津使より〜〜〜皮地より

同之より池田傳中より山崎甲斐守傳中

ありしより〜〜〜食色を并伝するの

〜〜〜考並 伝をうけし傳りし傳中

〜〜〜考並 制法を以てせ

同日より女清御殿受化此時より

法と心

同五年福徳左衛門大夫綱目より

考並 作を抄りし藝州より

國政を定む

同年智恵院山門經苑等佛建立の

とつとつと

同七年丹波乃郡代とす

寛永元年二條の淨城異地のとつと

なりとつと

同年賀茂等とつと小淨祖乃神社造

家のなりとつと

同五年別所を修む淨改易れとつと

その地一々を元々く法制とす

同十年叡山中堂講堂等佛建立の

とつとつと

同十一年御命とつとつと

とつとつと

同十二年一々を元々く五畿内と

つとつと

政長 まさなが

全次郎 生國武藏 なまくに

元和八年

將軍家より侍人より侍り侍院 きんざん

番 ばん とし

家紋 白黒一文字 しろくろいもんじ

● 集

荒木

家傳

秀郷

十代

波多野之節 義通 孫 刑部丞

義定 後 亂るり とき

大茂

播州 大物浦 一 なる 討死

義村

信濃

播磨池田は伯也世一池田乃六人
荒と号も二子費乃地を叙と

村重

童名十二郎

孫故とありて又

信濃と号寸

後後田位下は叙一

播津守一

伯也 播州有墨城一

居と

天文十八年村重十五歳乃時池田

勅吉清のるびよと流八人と討捕

これ世は所謂池田乃二十一人荒の内

る

同二十年村重伊丹兵庫頭が先鋒

宇治文作之丞と伊那寺一とあり

あひとありはとありとありとあり

義村^{よしむら}あれをよろこびて村重^{むらむね}一
家督^{けあつ}とゆつれ此ゆへに名を改^{かへ}め
信濃^{しのの}と号^{なづ}す

同二十一年白井^{しらい}河系^{がけい}合戦^{がせん}此と死
ふりて先鋒^{せんぽう}となりて茨木^{いばら}乃城^{のしろ}を
茨木^{いばら}佐渡^{さぶ}守^{まも}とあひさかひつ井^い
くみと佐渡^{さぶ}守^{まも}と討^うつにまひて村重^{むらむね}
率^{りつ}て茨木^{いばら}
と城^{しろ}をせめとまふと

よりと餘威^{よりのい}近境^{きんきやう}よりつるの聖白^{せいびやく}
いづれと十萬^{じゅうまん}貫^{くわん}乃地^{のち}を領^{りやう}す隣^{りん}乃
法^{ほふ}乃^の色^{しき}に属^{ぞく}するのありそに
とひく村重^{むらむね}織田^{おだ}信長^{のぶなが}に属^{ぞく}せんす
を信^{のぶ}とつる信^{のぶ}長^{なが}の村重^{むらむね}の
量^{りやう}を知^しる海^{うみ}のゆへにとれり遇^{あひま}
せし也^{なり}振津^{ふつ}一^{いつ}を村重^{むらむね}より給^{たま}り
且^{かつ}又^{また}後^{のち}田^{のち}位^い下^げに叙^{しよ}するはち侯^{こう}丹^{たん}
長^{なが}府^ふ政^{せい}の香^{かう}城^{じやう}なるびに之^{これ}田^{のち}乃^の城^{じやう}を

せめしりく三田乃城自馬おねと
誅とげと死る榎の城自和田伊賀と
嫡子和田太郎一旦村重一属と
いしと年月を属く乃ら及逆を
企まくにむむく村重とれとせめて
ろれ城をとる此ゆへ一玉みかゆ
眼とあまをひく村重信長と
うもく切ある者と賞く食邑と
日ろ池田久左衛門尉池田城と

本城五ふるり村重五万をく
うく山右近の監及南坊高榎の城と
乃城を領も本城四万なる村重四万
とくく塩河伯耆多田乃城と領も
本城二万なる荒本志摩守乃ら安志と
花隈城を領も本城二万なる
五子るとくく荒本平太夫
備中守之田乃城を領も食邑二万なり

安部仁彦の大和田一万石を領せしめ
十郎能登一万石を領せしめ異母弟荒木
次田吹田を領せしめ

信長紀州を征し羽柴
秀吉も秀吉を征し村重と軍
ねとも中務と征し移す時
秀吉村重を征し河内を領せしめ
一益をもちて軍ねと守村重播州
神吉城を領せしめ先帝を討つ

ゆへ信長を討つとむらさきを討つ
信長は徳川のとき徳川を討つ村重と
謀りて守村重を討つ村重を討つ
乃を討つ陳謝せんがめは嫡子村次とね
具一江州安去りていんとて
山崎を討つ岩をもとめ村重を
討つていひ安去りていひ
一安去りていひ一陳謝し
一安去りていひ一親戚朋友連

書をよめしむ信長の忿怒しわらざる
よしとほぐこりゆり村重途中より
へりし思此城一たぐこり信長
るしびし信忠大軍をおしとを
せじふといへども城固一て隔ち
し見仙子代為命と亡すに
をむく信長あひかり白城十二を搦て
しとを海とむるしむるし年
城中糧もてしはく系ゆ村重も信

し命しむ思此城を海とむ
ひりふしむけの共と海福あめ
しめし尼崎乃城しつ系此
瀬川一益ししりしより城中
及しものありし城もてにやがし
池田勝入父子為信長乃敵とけ
尼崎花隈とせめくあひたりあし
敷月より翌年之月しりて村重
城をうりし備後しり尾道

留在此此死信忠村重終云一
よりくくうろくをうさるを
あつれと思去を海小焼失
天正十年内智光秀信忠を執り
とすく村重もふりて哭踊しぬ
秀吉天下統一統乃好懐をく人給ひ
播州泉州のうちにをひく一而取
を海りりて地一屋居と
同十四年泉州境にをひく病死

村氏

年五十二

法名道薰

吹田と号は
信忠乃あはれに
信忠乃あはれに

村次

新五良 播州尾崎城一居と
母ハ小河原之河守女
是信秀吉一つふ

天正十八年江州志津島よとひく
軍忠をしげ海一疋とくあり歩
ふし守ふれゆり一弟村基をて
秀吉一いつく一め村次へよるく
秀吉一湯まらうれら
東照大権現湯憐慈あつり一ゆり湯入湯
一いふあつとあつと一礼とすて一
め一いつくきんともふらぬ不幸
一く病一りかつて死す年二十八

村基

孫四郎

秀吉一いつふ早世

女子

池田隼人の妻

伝女一いつあ一いつあ一いつあ

女子

信長一いつあ一いつあ

女子
女子
女子

荒木と号す 村常の養母なり

宗源院殿つづみ満つりおはせきと

將軍家つづみ満つり

村重

又三清

母ハ鳥帽子形の城主碓井固守の女

村満

孫介

松平右清の佐

村常

左馬 童名十二郎 母とよおる

村常三四歳乃と死父母を喪とこれ

由一 旧臣水河系与作の宅に養育

せしむるに揚州小野原より住ま
るに乃ち大坂に在りてより住ま
るに秀光孫教を全府内の遊士を
を制し境を諭しと禁む是
士卒とありめんがもるり村常と
きも幼児よりとゞも村童孫と
しよりし四石の親つらん事を
おもんごりあれををくんとめ
府内をいさぐもと落城の時あり

軍勢より難く海と住ま宅
いふ系湖長の後浪野にふる四好と
ころの藝州より海をよ呼杖助
をくつるより年久しと志しりと
ごと村常たが幕下より人をもん
るをぬぐひつかりるれ家と家
寛永十一年江戸よりきつ家
同十五年乃ち肥州始末に軍
しよりし正月二十七日は後地

つこすふらら細川肥後守がて
志々微志をらげ海を此時より
上使松平伊豆守信継一海を
取一信継顧問よる事よふら
厚一ろれらららりく
居

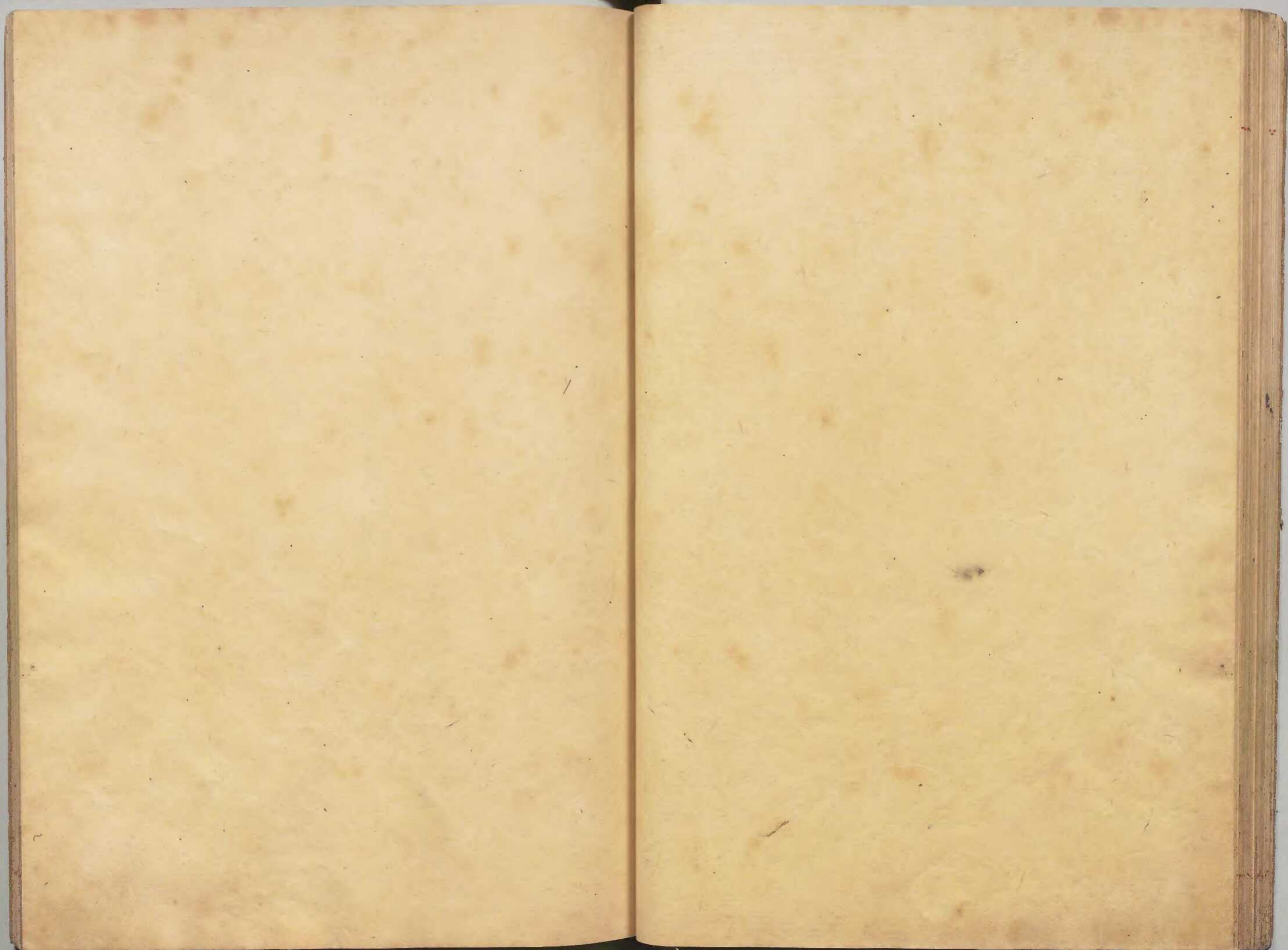
同十九年十一月二十九日信継が吹

り

將軍家へ湯一海つり翌年

正月十九日よりつめだく

家級 牡丹之本瓜



■ 某

大花

荒本

家傳いんよしいくい秀郷ひょうご乃の後のち胤いん荒本あらい
盛さか長なが苗なえ裔いるりとと云い々々

某

弓長清尉

某

美作

某

信濃

元清

志摩

法名安志

治一

石尾越後守

元満

荒木十左衛門尉

元和元年大坂清陣乃時りて

右藏院殿下瑞々

寛永二年

任りしより後河

大納言忠長卿おほのくさね ちゆなが けいより

元政げんせい

十右衛門尉

元和二年げんわににねんより

右衛門殿みぎのへもん どのより

寛永三年かんえいさんねんより

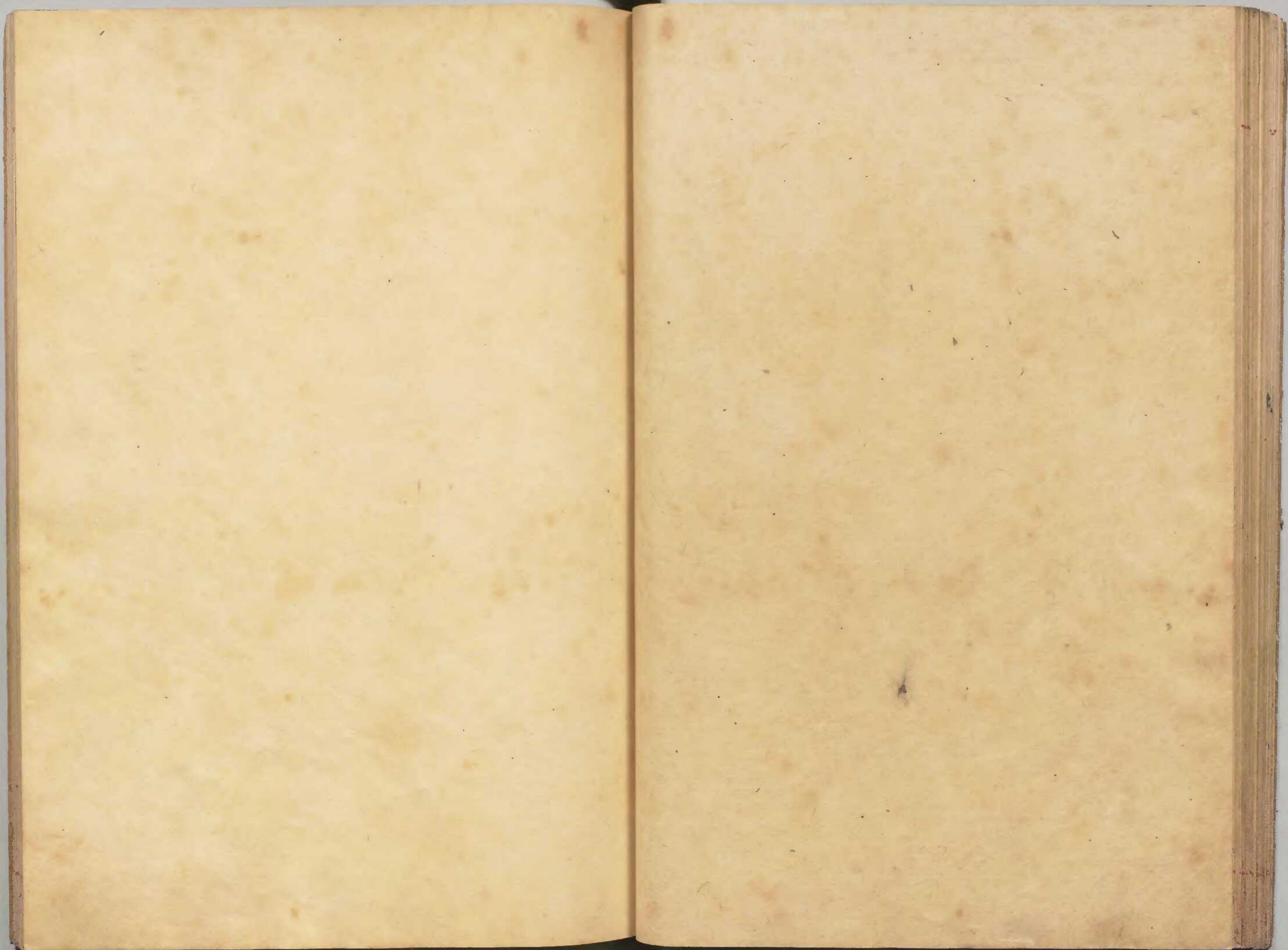
同九年どうくわねんより

同十二年どうじふにねんより

右軍家みぎのぐんけより

家紋

牡丹ぼたん



某

荒本大巻

本冬丹州波多野乃一ツなり後橋州
小修一と橋州荒本此元祀より

石尾

俵友左秀郷の後胤荒本盛虫と元祀
とすと傳稱と浪一よむく石尾と馬也

具

美作 攝州 一 佐々

元清

志摩 攝州 花隈乃城 一 あり

享長八年五月二十二日七十人歳 一

志と死と 法名安志

治一

浪又位下 越後守

治一 一 荒木と改石尾也

号寸

幼少より孝行秀吉 一 つ二人黄纒の

うすよそかろう家

安長十九年大坂陣乃と

東照大権現 一 一 ありとく魔下 一

属 一 たりとつれ

元和元年

大権現の御齋えび——

右徳院殿よし人こ——大坂車陣さいざ

小も海うみ——魔下まご——房ふら——大隅おほぐさの

総中そうちゆうよつつありあ位ゐををははししここ

寛永八年七月二十六日七十一歳

志し々々卒すす

治昌ちやう

右徳院尉

父治一ちち——

右徳院殿よ福ふく——

右山やま丸まる浄じやう陣じん中ちゆうよよととららせせしし

右徳院殿を孫まご——

同どう魔下まごよよ属ぞく——

治重ちゆう

右右みぎみぎ徳とく院いん尉じゆう

寛永九年八月

將軍家より賜す

同十七年三月十八日より清小姓しんせうの
乃番のばんとす

家の紋 とやハ橋はし杖つゑ 今いまハは葛くわの丸

今村イマムラ

秀郷九代ヒメタラ

●秀高ヒメタラ

川村カワムラ 振後守ウラノシ

義秀ヨシヒデ

川村之郎カワムラノロ

盛秀モリヒデ

二郎ニノロ

秀家

秀村

友方

今村五郎

強弓

重秀

秀通

孫五郎

孫六郎

此間断縁

勝長

彦吉清

冬州墨崎日生記

清康君廣忠郷

東照大権現 勤行 一々ゆつ

大権現 河上野の城を攻たまふと

敵槽より矢をふる事 雨此方

槽此方 夫を射み 敵底と

このおり かるが 敵槽と

このおり 夫を勝長日射と

三州墨崎 近邊一揆乃

三州墨崎 近邊一揆乃 軍功あり

又弓と弓くくびく名をありし寸
倉地平在るつが隠謀と弓く武田伝玄
を冬州一とむさいまんよん膳長是
とまきて

大指現一いつげむらよれら 仁とらあ
海りりく倉地と殊とふととと勤功
を上げますれと感げ海ひて飲地
とく久給ふ

大指現園東海入玉のとと膳長年花

之類ゆ一いつふ海つ事何とら
隠居一と清佐一と海つ寸控
も南初勤功あつ小よりと武州
小塚原一とむく飲地と海つと
役とゆれとふ

孝長五年八十一歳少一と死に

法名法善

正位

元和二年 食邑を之久し海軍 約
とうげく 伊豆下田の毒とつとむ
寛永四年 七十一歳少く死す
法名法光

傳右衛門尉 生國回前

大指現しつ人々くまらぬ

大坂陣に借をりて其級とゆら

軍忠とらげますり河津備中守とす

ひつにふまをきかひ

正時

傳茂 生國武茂

正位に養子とらる 寛永正長が子也

寛永六年

將軍家を孫礼し 清書院をた

とせ

正長

侍四郎 幸州濱松

名瀧院殿

とるり

元和元年大坂此陣

とらんれる敵の鉄炮

歩中敵陣

伯耆守が与力を友忠

るを借正長を此馬

とる入る名も然も正長が士卒

かざる捲く敵と討

うづれあにをひく正長忠を

いひぐるき家

よひくハ討死せん

中へ入ると町あま

そのるをゆるく

名瀧院殿

比千石をくらふ

同年十二月朔日

大権現の御前より参りし軍

忠をぬらんども此はしし御風の

御

同六年三月乙未三歳と正長法目

付とましく羽州家上りな

聖年四月乙未一

寛永元乙五月乙未好越はと正長法目

付とましく大坂よりな

九月一

同四年父が遺跡をつとて巨州下田の

番をほめ皮地

と海

同十年 任りし

丹波とと存り肥前此は長崎より

長崎の高船より

の事を沙汰

正成

傳三郎

生西武苑

台徳院殿

寛永十年三月

將軍家此おがせをうちたまひり正成

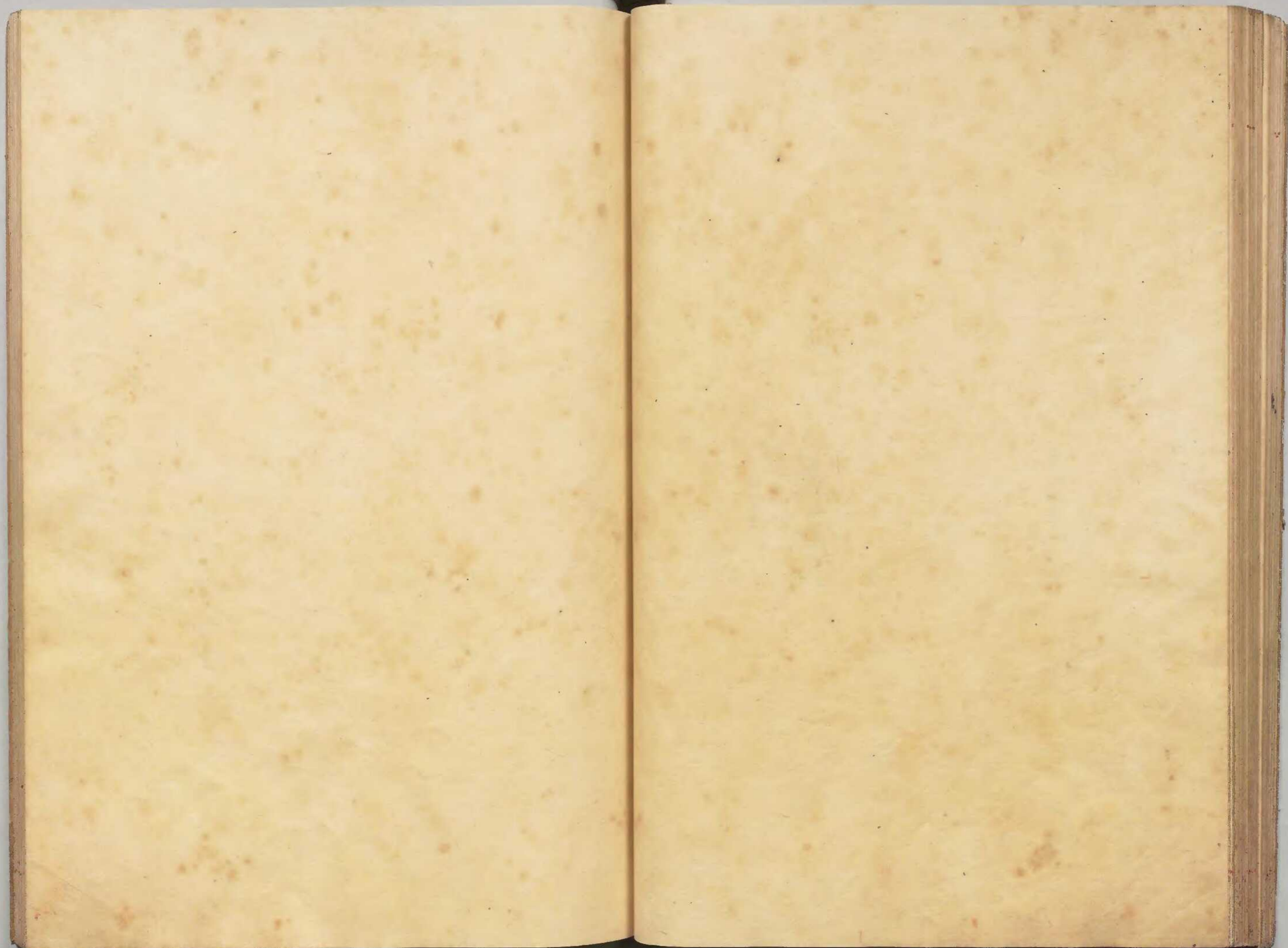
りり下田小左衛門同年十一月

いふれどもあはれをほむ

食邑五百石を領す

家乃紋

藤丸丸



今村イマムラ

吉久ヨシヒサ

東照大権現トウショウ
一ヒト人ヒト一ヒト由ユつツ歌カ
以ヨ良リ可カ解カ
生ナマ金カネ卷マキ河カハ法ホウ名ナ道ダウ清セイ

吉正ヨシマサ

九良卷クウリョウマキ
生ナマ金カネ同ドウ前マエ

大権現ノ一法也人たよく守る

天正十二年冬久々合戦の時名を
ゆかりうけり

台徳院殿

將軍家ヨ法之ニまゝ守るに涉^{やま}奉^か

川とつとむ

寛永十六年八月官ノ一死寸七十

五歳法名道^ぎ继^{けい}

吉重

九良吉清 生^{なま}小^こ ね^ね摸^も

吉正子^{よしただこ}た^たま^まよ^よの^のり^りと^と吉重と^{よししげ}同

る^るひ^ひく^く子^こと^と守^し実^みハ^ハ外^{ぐわい}祖^そ父^ふ坪^{つら}井^い合^あ太^{たい}史^し

か子るり

將軍家ヨ法ノ一とつとむ

寛永十七年五月朔日清書院^{しやうしょいん}書^かと

つとむ

家乃紋

友ともの丸まる内うちノ結むす

信正のぶただ

次大史つぎおほし

生必同前なまかならむ

信吉のぶきち

淡路あはぢ

生必信康なまかならむ

葦田下野あしだのしも与よ佐子さこ

関せき

葦田修理大夫同右衛門大夫一ツ子

天正十年

東照大権現甲州新府津出馬乃一ツ子

山小屋一ツ子一ツ子

より一ツ子一ツ子

萬七五年澁州買原津陣一ツ子

つとせ

同七年之月六日六十一歳山一ツ子

病死 法名道仲

伝久

孫三郎尉 生五回前

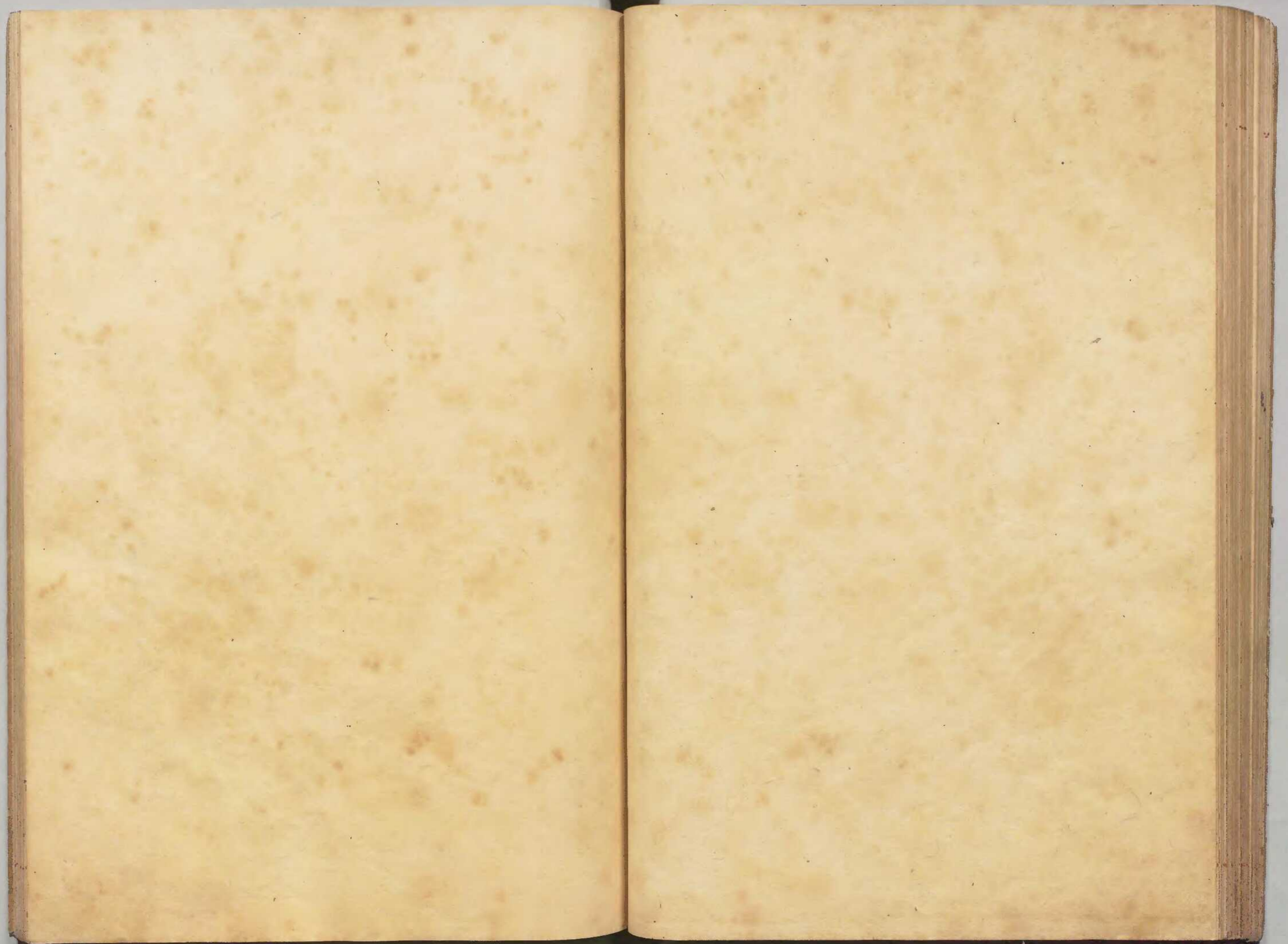
右徳院殿一ツ子一ツ子

萬七十九年元和元年大坂西夏の

津陣一ツ子一ツ子

乃軍家一ツ子一ツ子

家此級 上の蝶



音正

圖

赤右衛門尉

生石尾張

しごめは羽柴がねよつらんからい

前田孫五郎がもつたあり又寺沢志麻呂

よつらんから駿河大納言忠長

はかみ

正成 まさなり

普之郎

生家 同前

台徳院殿

將軍家一侍人なる侍

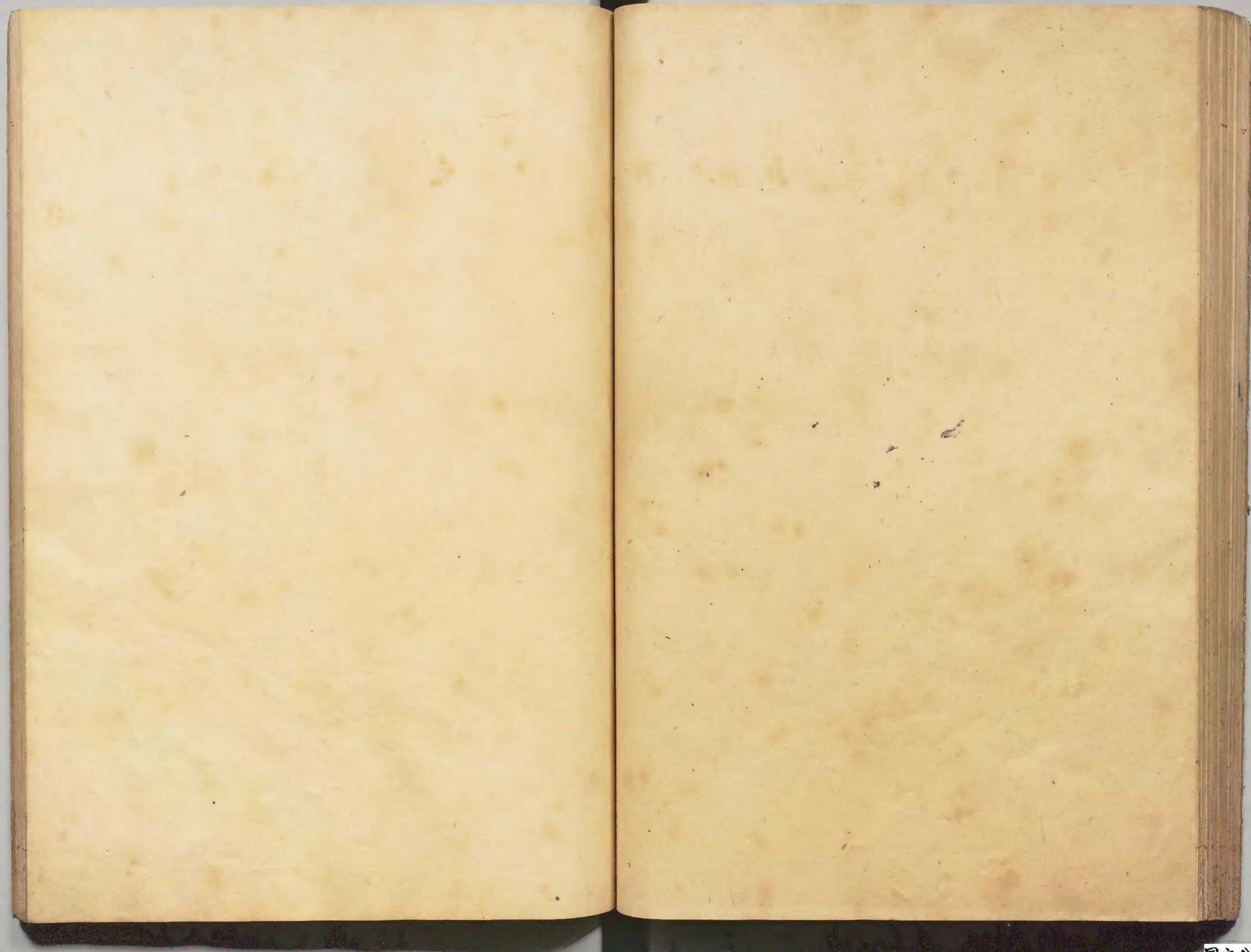
正重 まさしげ

平之郎

生家 むね 武苑

家此紋

丸乃内ま上羽うへの蝶ちょう



吉真

関

狭こま 生なま 信のぶ 法はふ 名な 長なが 水みづ
 葦田あしだ 修理しゆり 大おほ 吏し 一ひと 人ひと 跡あと 子こ 同どう 心こころ 之これ 人ひと
 足あし 将しょう 之これ 十じゅう 人ひと を あら け

吉道

五郎左衛門

生田 同前

天正十年

東照大権現甲州新府津陣乃時吉道

息男一人と贊として小條氏並に渡

いし山小屋より忠節とつ

孝長五年 宮原津陣乃と記

大権現乃り小窓より供奉と記

同十年四月七日六十日榮少と記

法名道霍

吉道

五郎左衛門

生田 上野

右徳院殿より法名とつ

孝長十九年元和元年大坂あ度れ

津陣より供奉とつ

將軍家より法名とつ

家紋

上あひらの羽蝶

● 光正

関

如藤

生心

信澄

成田信玄同勝頼了了信玄

正安

少三

生國同前

葦田右衛門大史一はふ
て正十年

東照大権現甲州新府一は出る此

と忠節ととも多満と小より関

原清陣の意

大権現より一いごうれ供奉とつとむ

正重

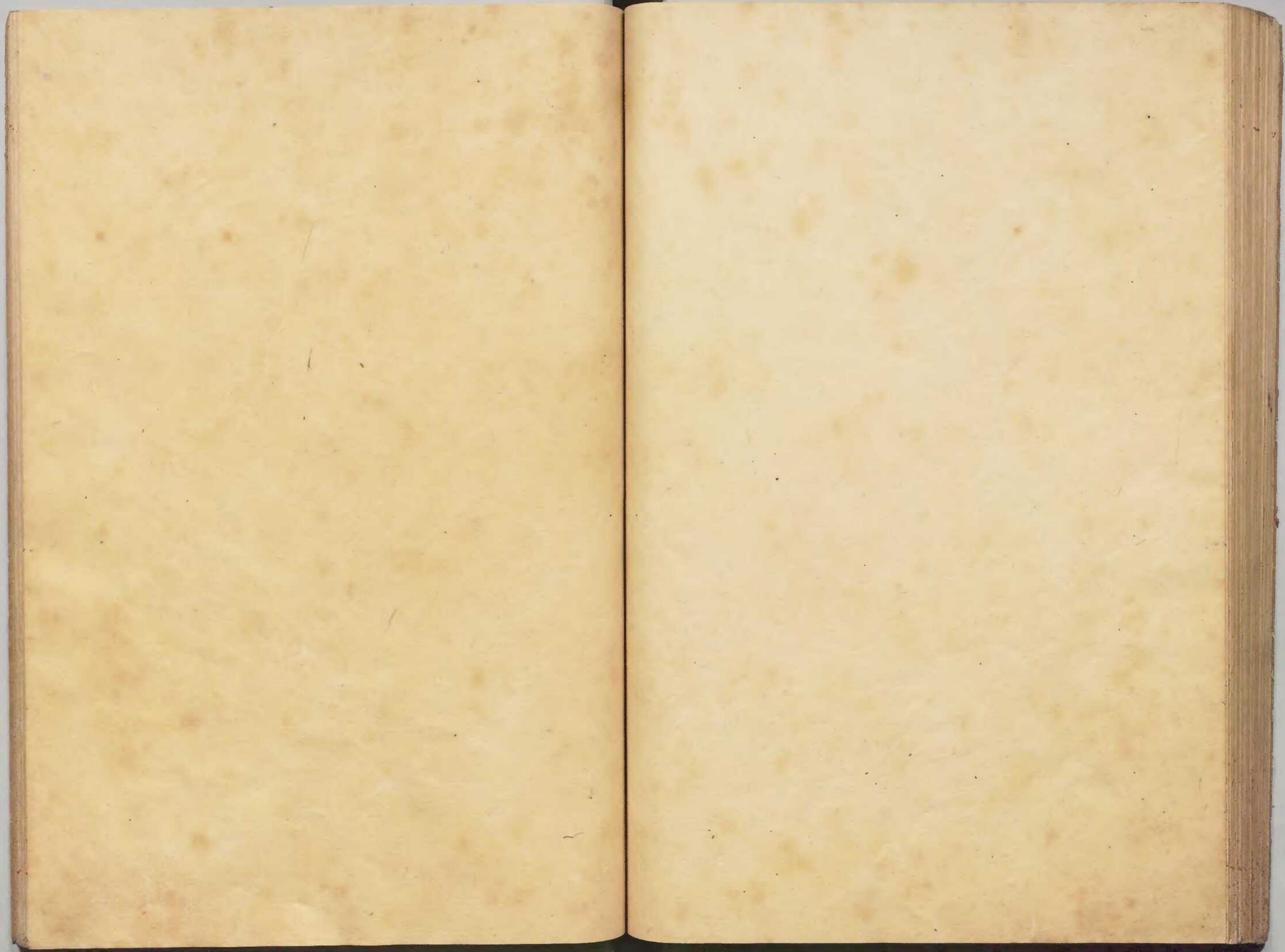
本二た忠の尉

生心上野

台徳院一はふまうり大坂あ度の
清陣ふまごひとまつりそのち
將軍家よはわくはつれ

家此紋

上羽の蝶



留田

某

以良書

生西卷河

東照大指現日法入之海つね

天正七年一死七歳六十九

某

金十郎 生田同家

大権現は法入とて海つり冬州
をひく三十貫乃銀魂とてまよ
と正十二年尾州長久寺合戦
供事と首級とゆりて賞也と
て在州原谷とてひく米地
十貫とて之と海つりて冬州と

貫を銀と

同十八年小田原陣のとき麾下
とてひく六十歳少とて死也
文禄元年九月二十三日冬州
とてひく六十歳少とて死也

政勝

庄長清 生田同家

右徳院殿

將軍家よつとく満つ

寛永十六年十一月廿六日一死

歳六十二 法名 淨龍

政成

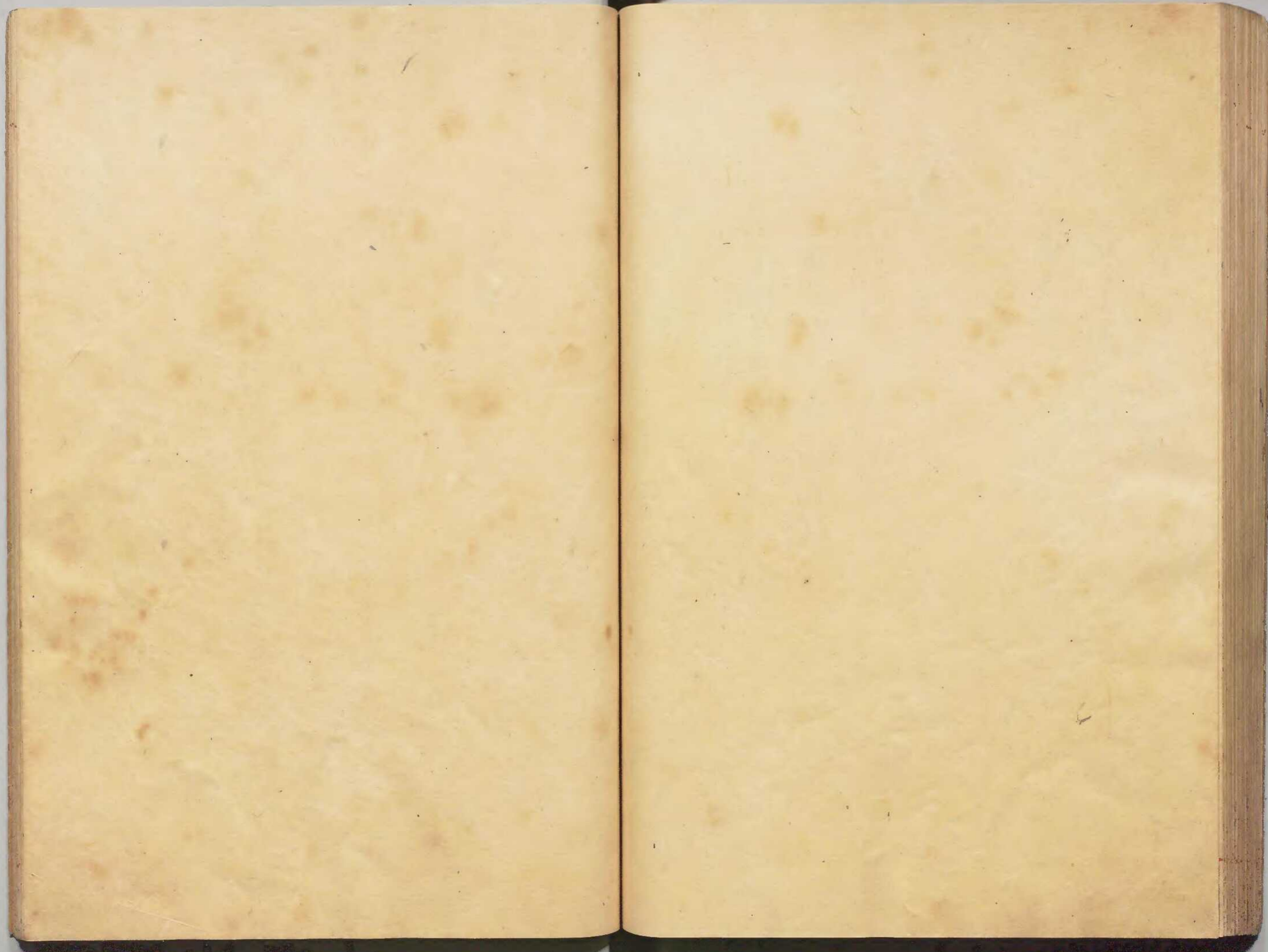
庄吉兼 生國 武苑

寛永十五年より

將軍家よつとく満つ

家乃紋

丸の内 櫛



富田

系弘

膳部丞尉

生員越前

東照大権現より法入をまほつりて
右徳院殿より法入をまほつりて

元和三年十一月 伯氏あり

將軍家よりつかりし御代より

伊太筆の役をつとむ

寛永八年三月七日一死に歳五十二

法名清見

系教 ひかり

勝太郎

生必駿河

幼弱のときより系弘ひらやぶひと子と

寸実すんじつハ系弘ひらが姪ひめなり

寛永四年三月一日歿

將軍家にお湯一伊太筆の役をつとむ

系教幼年こどもにして父ちちをうなまか

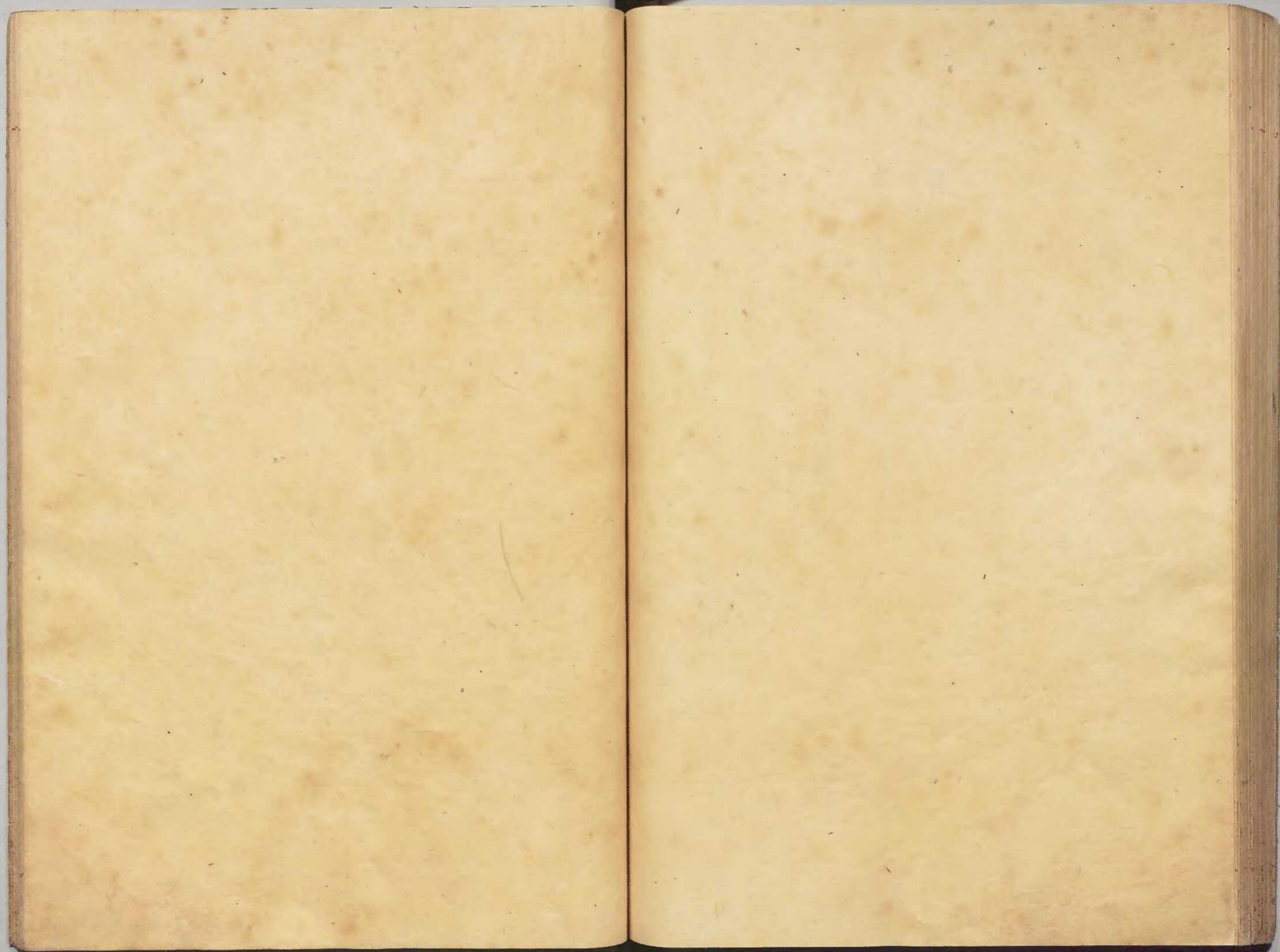
ぶぶぐぐゆゆへへは家系いけいははびびくくすす

系次 けいじ

徳茂

武剛ぶこう江戸江戸に生れ

家の紋 上友かみともの丸



木村きむら

秀郷ひでさか八代

● 有あり總そう

足利あしかが七郎しちらう

戸夫とと子こ也や号ごう寸すん

基もと總そう

依よ野のと号ごう尺せき

為系

前左衛門守

廣總

民部大吏 河曾沼と号す

伝總

五郎 累中より曾沼

保延五年四月死去 法名淨心

雅綱

木村の元祖 太郎 右衛門督

秀頼

喜應二年三月死去 法名明心

太田守郎

時總

三郎 右衛門佐 右衛門督

建久元多之月死去

時親

小次郎

信經のぶ

三郎 在任

承久四年 死す

治經のぶ

畠田 在任

行經のぶ

三郎

行親のぶ

建久七年 死す

五郎 在任

建保三年 死す

義經のぶ

五郎 在任

文永四年六月 死す

度の總子

太郎

文永八年一死也

延の總子

富の思子七郎

度の直子

小野の右子基子三郎

伝の重子

孫太郎

伝の政子

次郎右基

徳治元年十月一死也

秀の經子

又三郎右基

康永元年一死也

負總ふしゆ

又三郎

定總じやうしゆ

太郎

長門守ながののり

延文八年えんぶん一死いちし

信治のぶぢ

孫太郎

信茂のぶしげ

孫次郎

民部少輔たみべのすけ

應永二十三年おうえい六月一死いちし

信直のぶちき

尾曾戸おしそご

茂總しげしゆ

庄太郎

應永二十三年おうえい九月一日一死いちし

秀總いせふ

太郎

寛正八年二月廿一日死

秀治いぢ

彦次郎

文書を物く奥州にゆ

秀延いひ

彦次郎

文龜二年十月十一日死

房總ふさ

彦次郎

明應九年二月二十八日死

法名道光

信澄のぶ

法名快与

持久もちひさ

左衛門加賀守 生田下野なげの

天文二十年正月二日に死に

法名了阿弥陀あまの仏ぶつ

高光たかみつ

亮六郎

永禄三年四月十八日に死に

法名眼阿弥陀あまの佛ぶつ

信久のぶひさ

平之郎 左衛門尉 生田下野

母是乃中里長門守なかつらながのむすめあり

東照大権現とうしょうだいこんげんつとくはつね

享長三年七月二十二日に死に 法名

僧阿弥陀あまの仏ぶつ

先行さきゆき

女子

女子

女子

阿曾あそ沼ぬま小こ三さん郎らうの母はは

女子

則すなは總ちゆう

久ひさ在ざい患ゑん 生なま國くに遠とほの

大指おほさし現げん

古ふる德とく院いん殿でん一いつはは人ひと一いつはは一いつはは一いつはは

元げん和わ八はち年ねん十じゅう月げつ十じゅう二に日にち一いつはは死しす

光みつ久ひさ

法はふ名な但た阿あ孫そん改かい仏ぶつ

城じやう剛ごう伏ふく見けん一いつはは一いつはは一いつはは一いつはは

英えい總ちゆう

小こ源げん右う 生なま心こころ 在ある

十じゅう二に歳さいのときには林はやし佑たすけあまとは光みつ政まさのきみ養やしやう子こ

とならばからからゆへにはらし林はやし惣そう三さん郎らうと

号ごう以い

大指おほさし現げん

白瀝院殿

將軍家より法入りしと傳ふ

寛永十年四月二日一死す

法名法蓮

信

也

武州江戸に生る

白瀝院殿

將軍家より法入りしと傳ふ

信清

童名 松島丸 早世

信年

母 長島 母 中多右郎在桑の妹

白瀝院殿

將軍家より法入りしと傳ふ

宗

久在島 母 林長右衛門の女

台漣院殿

乃軍家ノ法ハ如ク入リ々々海ノ波ノ如ク

家此紋

之ハ左ニ巴ニ

